

新たな地域活性化の核としての地方空港



なかやま よしたか
中山 義隆
いしがき
石垣市長(沖縄県)



ふくだ よしひこ
福田 良彦
いわくに
岩国市長(山口県)



しまだ じょういち
島田 穰一
おみたま
小美玉市長(茨城県)



つや えいこう
津谷 永光
きたあきた
北秋田市長(秋田県)

司会・コーディネーター

ほその すけひろ

細野 助博

中央大学総合政策学部教授

各地の空の玄関口である地方空港。観光振興、企業誘致、移住定住の促進、地方間の交流の活発化など、多様な役割を果たしています。

近年は、訪日観光客の増加という状況を受けて、さらなるインバウンドの促進を目指し、国際線の誘致活動を推進したり、空港の周辺の都市同士で連携して広域観光に取り組む都市も増えています。

座談会では地域資源でもある空港を活用し、地域活性化に努める津谷・北秋田市長、島田・小美玉市長、福田・岩国市長、中山・石垣市長にお集まりいただき、各空港の開港の経緯や特徴、空港を生かしたインバウンドの促進策、広域観光の必要性などについて、幅広くお話しいただきました。

(本文中の役職名・敬称は一部省略しています)

開港の背景と現在の状況

細野 経済が成長し、人々の所得が向上すると、時間に対する価値が高まります。当然、移動時間の短い交通手段が求められるようになります。これが、日本各地に100近い空港がつけられた理由の一つです。本日はこの空港という有効資源をいかに活用し、地域の活性化に結

空港開港は地域にとって
長年の悲願でした。
今後は高速道路を生かした、
広域観光にも取り組みたい。



津谷 永光
北秋田市長(秋田県)

び付けていくか、ご議論を深めていただきたいと思えます。まずは各市長にそれぞれの空港の特徴から、お話しただけですでしょうか。

津谷 大館能代空港おほだてのしろは平成10年に北秋田市内に開港しましたが、これは私たちにとって長年の悲願ともいえるべきものでした。かつて北秋田市を含む秋田県北地域には、首都圏へ直結する公共交通機関は夜行寝台しかなく、東京へ行くにも半日以上を要した時代がありました。さらに、今年度、ようやく空港近くに高速道路のインターチェンジが設けられますが、これまで高速道路や新幹線の恩恵をほとんど受けてきませんでした。

そうした状況の中で、昭和50年代後半から、県議会でも空港開設に向けた議論が始まりました。道路や鉄道のように一帯を「線」として整備するには、相当な時間が掛かりますが、空港は「点」をつくればすぐに活用できます。

空港建設に対する期待は地域全体に浸透していきました。反対運動はまったく起きなかったところか、むしろ早く空港建設を実現してほしいと、地元の商工会、婦人会など各団体・組織が結集。近隣の18市町村で期成同盟をつくり、国会議員や当時の運輸省へ陳情を行うなど、大々的に運動を展開していきました。このように、大館能代空港は地域の熱意で誕生したという特徴があります。

現在の定期便は東京のみで、1日2往復の運航ですが、昨年度の搭乗率は60%ほど。忠犬ハチ公にちなんで、8のつく日にお客さまを秋田犬が空港でお出迎えするなど、利用促進、搭乗率の向上に向けて取り組んでいます。

島田 茨城空港は、元々市内にあった航空自衛

隊百里飛行場を民間共用化した空港として、平成22年3月に開港し、現在、8年目を迎えました。国内線は、札幌、神戸、福岡、那覇の国内4都市に1日6便、国際線は中国の上海に週6便運航しています。平成22年度は約20万人だった搭乗者も、平成28年度には約61万人と、大幅な伸びを示しています。また、自衛隊機の離着陸も見られるとあって、見学者が多いのも特徴です。

小美玉市ではこの茨城空港という資源を最大限に生かし、地域振興・活性化に取り組むために位置付け、各種事業促進を図っています。

地域活性化の観点から、特に大きな期待をかけているのは、平成26年7月に空港近くにオープンした「空のえき そ・ら・ら」です。地元産野菜が食べられるバイキング方式のレストランや直売所などを整備したほか、住民が販売活動



忠犬ハチ公にちなんで、8のつく日にお客さまを秋田犬が空港でお出迎え(北秋田市)

直売所や
レストランなどを併設した
「空のえき そ・ら・ら」を
開設しました。空港との
相乗効果を期待しています。



島田 稜一
小美玉市長(茨城県)

を通じて地元農畜産物や特産品の紹介を行いながら将来の独立を目指す店舗「チャレンジショップ」も備えています。ぜひ、空港との相乗効果を生み出していきたいと思えます。

また、平成19年の空港開港前から「小美玉市茨城空港利用促進協議会」を設立し、県内外で幅広い利用促進活動を行っています。さらに、子ども向けに職業体験教室、ハロウィンパーティを開催するなど、空港のにぎわいづくりの

取り組みも進めています。

福田 岩国錦帯橋空港は米軍との軍民共用空港として、平成24年に開港しました。長年にわたって、地元が開設を要望し続けてきた空港です。昭和20年代から30年代にかけて、国際便を含めた民間機の定期便が就航していた事実があったことから、今回の軍民共用化は民間空港再開に当たるとして、粘り強く交渉したことが実りました。

開港当初は岩国・羽田間1日4往復でスタートしましたが、好調な利用実績から平成28年3月からは1日5往復となりました。また、今年の3月から那覇への定期便の就航も始まりました。

現在、人口流出の抑制が地方都市の大きな課題になっていますが、岩国市では開港を機に企業誘致に注力したところ、これまでに17社もの企業に岩国市へ進出していただきました。約410人も地元採用があり、人口減少対策としても、大きな効果があると感じています。

岩国錦帯橋空港は市街地から近いところに立地しているのも特徴の一つです。空港内の動線が短く、コンパクトなため、まさに駅に行っても乗車に乘るような感覚で利用できます。さらに、まちなかに空港が立地する特性を生かして、イベントや催しを積極的に開くなど、地域のにぎわい交流拠点としても機能しています。

中山 離島県である沖縄県には国が設置し、管理する那覇空港のほかに、県が設置し、市町村が管理する12の空港があります。住民はバスやタクシーに乗るような感じで、飛行機を日常的に利用しています。

石垣市では、第二次大戦中に整備された石



旅客動線を1階に集約した、コンパクトなターミナルが特徴の茨城空港(小美玉市)

垣空港(旧空港)が長らく使われてきましたが、滑走路の長さが1500mと不十分なことから、新空港の建設が進められました。これが、平成25年に開港した「南ぬ島石垣空港」です。旧空港より500m長い2000mの滑走路を備えたことで、中型ジェット機の就航が可能になったほか、新たに国際線ターミナルも整備しました。

ただし、開港までには大きな苦労がありました。事業採択は昭和57年になされたものの、位置選定の問題や建設に伴う自然保護への対応に、十分な時間を掛ける必要があったからです。

現在、沖縄県内では那覇、宮古島、与那国島、県外では東京、関西、中部、福岡、国際線としては台北、香港への定期便が就航しています。新空港開港による効果は著しいものがあります。国内線の乗降客数については、平成24年の



平成24年に開港した岩国錦帯橋空港の全景(岩国市)

約169万人から平成28年は約238万人へと約1.4倍、国際線に関しては、新たに香港線の就航が実現したこともあり、平成24年の1万3329人から、平成28年は4万6139人へと約3.5倍の伸びを示しています。こうした需要の高まりを受けて、駐機場の拡張や国際線ターミナルビルの増改築などを進めていくことにしています。

さらなるインバウンド促進に向けて

細野 近年、急激な伸びを見せているのが訪日外国人観光客の数です。この動きを地域活性化に向けてどう取り込もうとされているのか、お聞かせください。

津谷 8年ほど前になりますが、県知事と秋田県北地域の自治体の首長とで、台湾の旅行会社などへトップセールスを行ったことがあります。それが実って、台湾から国際チャーター便

福田 良彦
岩国市長(山口県)

周辺の空港立地自治体とも連携し、各地を周遊できる旅行商品や観光ルートづくりにも取り組んでいきたい。

をお招きし、広域観光のツアーを実施したことがあります。その直後に東日本大震災が発生し、継続できなかつたという経緯があります。

とはいえ、秋田県北地域は森吉山の樹氷群、かくのたて角館の桜、景色が素晴らしいローカル線として知られる第三セクター「秋田内陸縦貫鉄道」、阿仁地区に伝わるマタギ文化など、さまざまな観光資源を有しています。特に、雪が降らない

台湾の観光客にとって、樹氷は大変喜ばれています。秋田内陸縦貫鉄道も人気が高く、1万8000人ほどの外国人観光客が乗車しています。定期便やチャーター便がない中でも、外国人観光客の数は着実に増えています。

中山 台湾の方にとって、北秋田市で樹氷を見るのは貴重な体験ですね。逆に普段寒い地域で暮らす方にとっては、われわれのような温暖な地域は魅力でしょう。その観点から、今、石垣市が進めているのが、北欧を中心としたヨーロッパ諸国に対するプロモーションです。今年から香港便が就航した利点を生かして、香港を経由する形で、石垣を訪れていたかどうかと、積極的に売り込みをかけています。

福田 6月議会において、厚木基地からの米空母艦載機の受け入れを正式に表明しました。米軍人とその家族を合わせると、約1万1000人が岩国市に移り住むことになりました。こうした方々を含め海外の方から見ると、岩国市の魅力は何か、逆に不足しているものは何かなど、われわれにはなかなか気づきにくい点を率直にご指摘いただくことで、観光資源の磨き上げ、インバウンドの促進につなげていければと考えています。

細野 外からの目で地元を見てもらうことで、地域の埋もれた魅力に対してさまざまな気付きが得られますね。

福田 例えば、地域に長い河川がない沖縄からの観光客に、市内を流れる清流錦川は特に人気です。地元の人には見慣れた風景であっても、市外の方に喜ばれる観光資源はあるのだと改めて実感しています。そうした気付きを得るためにも、多くの関係者と意見交換をすることが重



「南ぬ島 石垣空港」(国内線)の外観(石垣市)

(写真提供: 石垣空港ターミナル株)

要だと考えています。

島田 小美玉市では空港が開港すると県内外への単なる通過点にならないかとの危惧(きぐ)が開港前からありました。そこで、空港周辺7市町の行政や商工会・観光協会などで構成する「茨城空港周辺地域資源活用推進連絡会」を設立し、各種PR活動などを進めてきました。また上海の観光客に向けては、体験型ツアーを開催したり、市のPR動画を中国のSNSに発信するなどしています。

中山 台湾からの観光客の増加も、われわれの戦略の一つです。現在、台北から約1万人の観光客が訪れていますが、圏域人口を考えると、さらに大きな可能性がありますから、台北に市の職員を常駐で派遣して、プロモーションを展開しています。併せて、石垣から2、3時間で到着できる外国の都市をターゲットに、新たな国際便の就航も目指しています。

新空港開港により国内線の乗降客数はそれ以前の約1.4倍、国際線に関しては約3.5倍。著しい効果が出ています。



中山 義隆
石垣市長(沖縄県)

島田 茨城空港にはさまざまな国から国際チャーター便が就航しますが、県知事をはじめ、私たち地元の関係者が特産のヨーグルトをプレゼントするなど、熱烈に歓迎します。そうしたおもてなしが、口コミで広まったのでしょうか、台湾の旅行検索サイト「スカイスキヤナー」から発表された「2017台湾で人気上昇

の旅行先トップテン」において、日本国内では何とわが小美玉市が第1位に選ばれました。

空港を生かした広域観光の可能性

細野 観光客の誘致やPRを効果的に行うには、近接する複数の地域が連携して広域的に取り組むことも大切ですね。

津谷 北秋田市では高速道路の延伸により、交通アクセスが格段に向上します。これにより、秋田県北地域、岩手県西部地域、青森県南部地域全体を視野に入れた広域観光の可能性が広がります。

島田 広域観光という観点では、確かに空港へのアクセスは非常に大事ですね。小美玉市の場合、常磐自動車道のインターチェンジから空港まで渋滞が慢性化している実態がありますから、茨城県とともにインターチェンジからのアクセス道路の整備を進めています。

福田 岩国錦帯橋空港は、広島空港、萩石見空港、宇部空港、松山空港の4空港に囲まれた地点に位置しています。それらの空港立地自治体とも連携し、各地を周遊できる旅行商品や観光ルートづくりにも取り組んでいきたいですね。インとアウトが別の空港であっても、圏域全体として活性化を目指していく発想も必要だと思います。

中山 ある大手航空会社では、来日した外国人観光客を対象として、国内線1区間の運賃を1万800円とする新商品を販売しています。そうした中で、自らルートをつくって、ゆっくりと日本各地を回る外国人観光客も増えてきました。そのような状況に対応するためにも、今後は空港を軸にした国内のネットワーク形成が

重要になってくるはずですが。

付加価値の高い観光を目指す

細野 経済の活性化のためには、お金と時間にゆとりがある層の誘客もポイントになるでしょう。この点に関するご意見もお聞かせいただきたいと思います。

津谷 その地域でしか体験できないものを提供することが大事ではないでしょうか。例えば、北秋田市ではいろいろを囲んで、現役のマガギの方と言葉を変えながら、名物のジビエ料理、さらには特区の認定を受けて製造した、地元産のどぶろくを楽しんでいただく。そして、できるだけ地元の宿泊施設に宿泊していただく。そうした独自の観光を提供することが、経済効果を高めることにつながると思います。

福田 岩国市には、高森牛や蓮根などの特産品、「雁木」「五橋」「金冠黒松」「金雀」「瀬祭」の銘酒もありますし、錦帯橋や錦川などの観光資源も豊富です。さらに、30分車を走らせれば世界遺産に登録された宮島にも行けます。空港を生かしながら、このような独自の強みをいかに高付加価値化して、広く発信できるかが今の課題



細野 助博
中央大学総合政策学部教授

です。その観点から、今年度、庁内に専門の部署を立ち上げ、シティプロモーションやブランド推進を図っています。

島田 小美玉市では、市の名前である「小さく美しい玉」を宝石の王様「ダイヤモンド」に見立て、それを磨き上げ、光を当てて輝かせるまちを目指した「ダイヤモンドシティ・プロジェクト」を進めています。小美玉市を含め、茨城県の地域は発信力が弱いところがありますから、同プロジェクトの一環で、シティプロモーションにも力を入れていきます。

津谷 確かに北秋田市も観光地としての歴史がないために、市民がおもてなしに慣れていないという面があります。今後はそうした市民の対応力も必要になると思っています。

中山 観光客の増加に合わせて、宿泊施設の建設も進んでいます。富裕層を受け入れるには、国際的に認知度が高いホテルを誘致するなど、グレードを高めていくことが必要です。

一方で、繁華街から離れた家族経営の宿泊施設であっても、あえて宿泊費を高くして、高品質なサービスを提供しているところは根強い人気があります。規模が小さいことを逆手に取って、なかなか予約が取れないことで、さらなる評判を呼んでいる施設もあるようです。そうした独自の工夫も、これからの観光振興では必要になってくると思います。

細野 その地域を訪れないと食べられない、体験できないものを、付加価値を上げて提供する。空港を入り口としながら、そうした戦略を練り上げ、地域全体で実行していくことの重要性がよく分かりました。そのためには、訪れた人たちのニーズや評価を今後のために参考にす

るべきです。

一方で、単独の地域だけで観光振興を図るのではなく、複数の地域が連携して、広域的に取り組むことの大切さも、本日のお話を通じて、改めて認識させられました。今後もそれぞれの都市で取り組みを進めるとともに、ぜひ空港同士のネットワークを生かしながら、さまざまな自治体と力を合わせ、効果的に施策を進めていただきたいと思います。それが、日本全体の魅力向上にもつながると思います。本日はありがとうございました。

(平成29年7月12日、全国都市会館にて開催)

本コーナーは隔月掲載となります。次回は1月号に掲載予定です。

